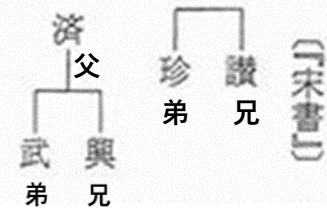
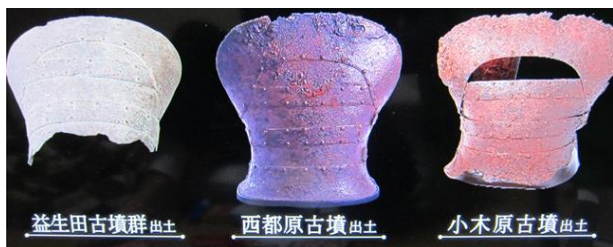
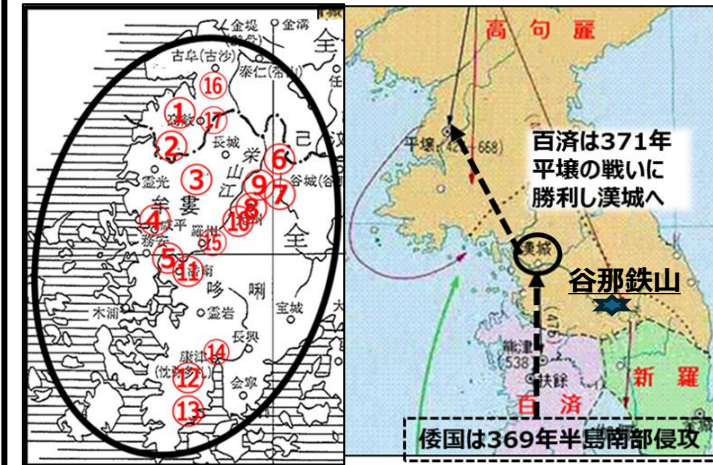


「磐井前史」

1世紀から倭の5王に至る倭国の対外戦史

- 1、甲冑が明らかにした北部九州の「武人」の百済での軍事活動
- 2、1世紀～4世紀倭国は男王時代から女王時代へ
- 3、「七枝刀」の生産地「谷那鉄山」
- 4、「倭の女王」時代から男王「讃」の半島進出へ
- ①「讃」の時代の半島進出ー「貴国に礼なし」とは
- ②確認された首都漢城への倭人・倭兵進出
- 5、「讃」から「珍」へー倭国は百済南西部を「直接支配」
- 6、「珍」の百済南西部への駐留と「済」の即位と崩御
- 7、「対高句麗戦」での済・興の崩御
- 8、455年「済」、475年「興」崩御と倭王武即位



百済の甲冑は「倭の5王時代（5世紀前半以後）に古墳に埋葬された北部九州の武装した倭人」の存在の証

（略）百済も5世紀前半以後、倭系甲冑が確認されるが、韓半島西南海岸の倭系古墳から出土する事例が大部分である。興味深いのは、その墓制が北部九州地域の中小古墳の様相とよく似ている点である。」金赫中（キムヒョクチュン）（国立金海博物館）「韓国の帯金式甲冑」（月間考古学ジャーナル771、2022年）

百濟南西部の前方後円墳
を核とする北部九州様式の
古墳コロニーはそうした武人
集団を含む墓群だった

古墳も甲冑も文
献も倭の5王時
代高句麗・新羅と
戦ったのは北部九
州勢力だったこと
を示しています。

Three bronze helmets (kabuto) from the Yayoi period. The helmet on the left is light-colored with horizontal ridges. The middle helmet is dark with horizontal ridges and a central crest. The helmet on the right is reddish-brown with horizontal ridges and a central crest. Each helmet is shown against a black background.

益生田古墳群出土 西都原古墳出土 小木原古墳出土

共通の型を用いたとする古墳出土の甲冑群

宮崎県えびの市
小木原1号地下式横穴墓 横板板新留短甲

宮崎県

西都原 4 号地下式横穴墓 横穴板新留短甲 (1 号短甲)

福岡県



福岡県行橋市
馬場代2号地 横切板敷留地甲

* 出土品ではないが857年(天安元年)開山とされる長野県飯田市立石蔵の短甲も同一型が使われている

を討たん)

2

図2. 榮山江流域における前方後円形古墳と周辺の古墳群の分布図

『倭王武の上表』順帝の昇明二年（478）「今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べん（無道な高句麗を討たん）」
『書紀』雄略23年（479）筑紫安致臣・馬飼臣等、船師を率ゐて高麗を撃つ。

倭国の男王時代「倭奴国王一帥升」⇒女王時代「神功皇后（倭弥呼・壹與一玉垂命）」

3世紀〜4世紀の倭国は「女王」の時代



『後漢書』**建武中元2年（57）倭奴国**奉貢朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の南界を極める也、光武賜に印綬を以てす。**安帝永初元年（107）倭国王帥升等**、生口百六十人を献じ請見をねがう。⇒「**倭奴国**」＝「倭」音は「み」

『魏志倭人伝』**景初2年（238）倭弥呼**魏の明帝に遣使。親魏倭王の称号を得、金印と宝物を下賜される。**正始元年（240）**魏使梯儻（ていしゅん）ら女王国に派遣される。正始8年（247）倭弥呼、狗奴国王卑弥弓呼と相攻撃す。塞曹掾史張政等が派遣され詔書・黄幢を齎す。⇒倭弥呼死し、短期の男王時代を経て**壹與即位**。『晋書』**266年朝貢**。⇒**邪馬壹国は「ヤマゐ国」、壹與は「みよ」**

西晋は316年滅亡半島への中国の支配力が希薄化

＊『魏志東夷伝』弁辰条「国は鉄を出し、韓、濊、倭皆従ひてこれを取る。」

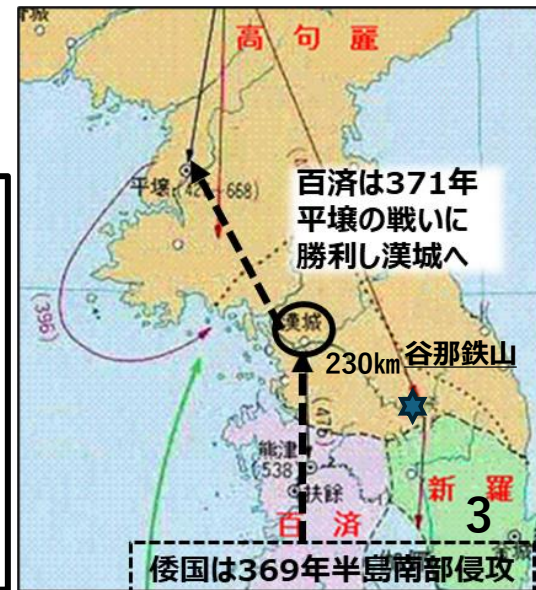


弾琴台土城出土鉄鋌

倭国は鉄需要を背景に半島に進出、百済を支援し新羅・高句麗討伐

好太王碑で「倭は百済・加羅・新羅を臣民とする」とあるがその「前段」がこの討伐。

『書紀』神功47年（247・実年367）百済朝貢、**49年（249・実年369）新羅を襲い比自炆（ひしほ）・南加羅・喙（とく）国・安羅・多羅・卓淳・加羅七国平定**。枕彌多禮（済州島）を百済に帰属させる（百済帰属を認める）また、馬韓地域4邑も百済に属させる。また、**辟支山で同盟関係を確認（辟支山の盟約）**⇒この年百済は高句麗に攻められるが、371年に高句麗を攻め故国原王を討伐する。勝利は倭国の支援によるか。＊『三国史記』（369年）高句麗王斯由（＊故国原王）歩騎二萬を帥ゐ、來りて雉壤に屯み、兵を分け民戸を侵奪す。（371年）王（肖古王）と太子（仇首）精兵三萬を帥ゐ、高句麗を侵し、平壤城を攻む。麗王斯由釗、力戦しこれを拒ぐも、流矢に中り死す。



倭弥呼時代における鉄需要の高まりと鉄器の分布ー強く鉄を欲したのは九州の勢力だった

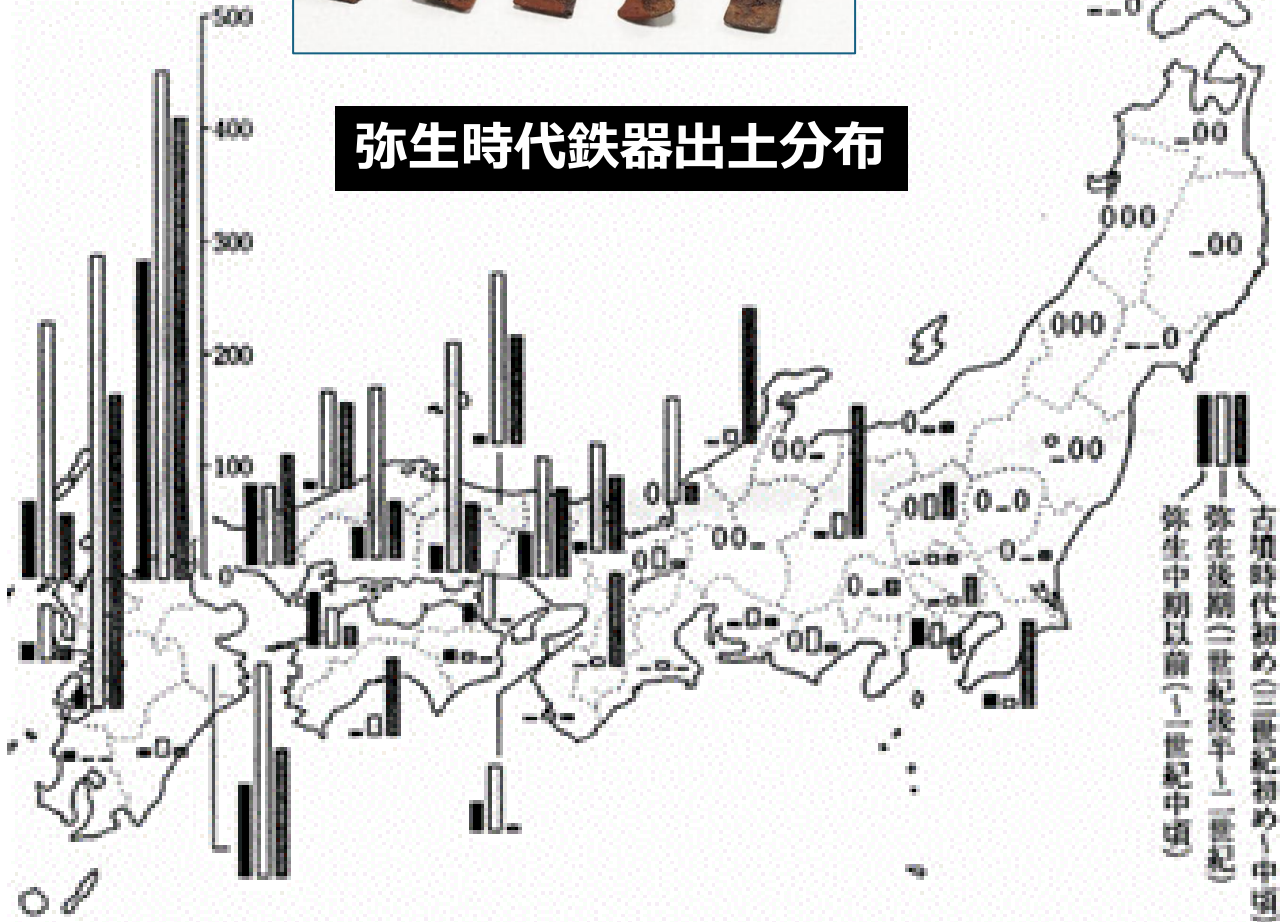
鉄



「鉄鋌」福岡県小郡市花簗2号墳（5世紀）出土



「甲冑」福岡県朝倉市小田茶臼塚古墳（5世紀）出土



弥生時代鉄器出土分布

福岡県と奈良県の比較

県		福岡県	奈良県
諸遺物			
『魏志倭人伝』記載の遺物（AD300年）	弥生時代の鉄鋌	398個	4個
	鉄 刀	17本	0本
	素環頭大刀・素環頭鉄剣	16本	0本
	鉄 剣	46本	1本
	鉄 矛	7本	0本
	鉄 戈	16本	0本
	素環頭刀子・刀子	210個	0個
	絹製品出土地	15地点	2地点
300年～	10種の魏晉鏡	37面	2面
	三角縁神獸鏡	49面	100面
	前方後円墳（80m 以上）	23基	88基
	前方後円墳（100m 以上）	6基	72基

辰韓国、鉄を出す、韓・濊・倭皆従いてこれをとる。

「七枝刀」の生産地「谷那鉄山」弾琴台土城(忠清北道忠州市)

済州島を百済に帰属させ、高句麗戦を支援したのは鉄資源の獲得の見返り

『書紀』神功46年（246・実年366）百済肖古王、卓淳国に派遣された斯摩宿禰に鉄鋌40枚を献じる。

『書紀』神功52年（252・実年372）に、百済近肖古王と世子貴須が泰（和）4年（369）銘の七支刀（石上神社伝世）・七子鏡を献上。谷那鉄山の鉄を末永く献上することを約す。また毎年の朝貢を約す。

同神功52年（252・実年372）「臣の国の西に、水有り（* 漢江）、源は谷那鉄山（忠清北道忠州市月岳山か）より出ず。其の遡（とおき）こと七日行けども及ばず。當に是の水を飲み便（まさ）に是の山の鉄を取りて、以て永く聖朝に奉らむ。…」

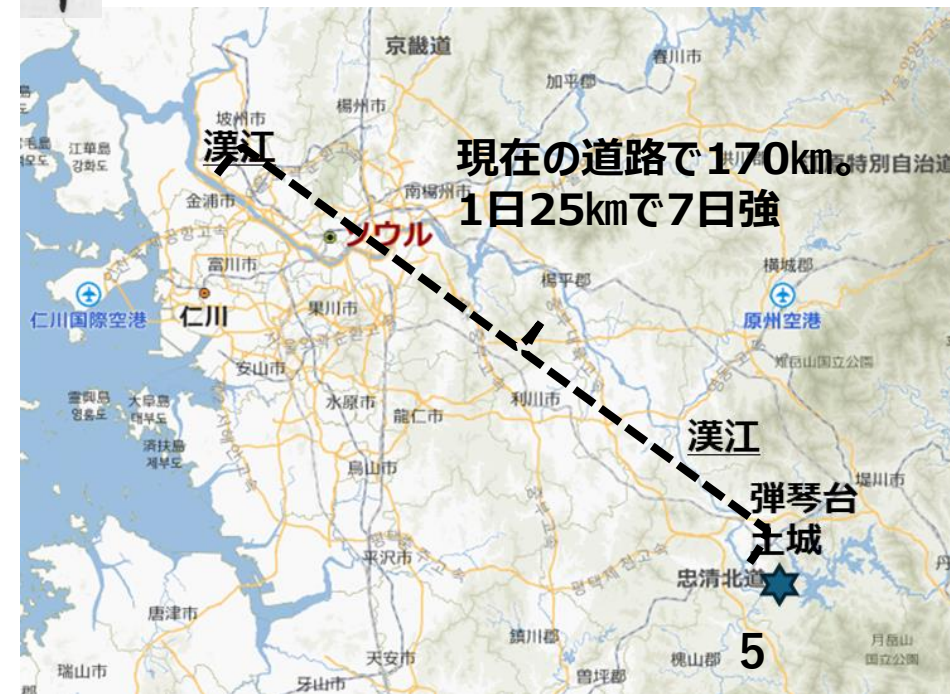
弾琴台土城製錬炉遺構の発見

「弾琴台土城(忠清北道忠州市)」: 2007年調査では平均寸法L30.7 cm、W4.13cm、T 1.45cm、1.31kgの棒状鉄鋌40本が発掘され、2016年～2017年調査で、3層にわたる製錬炉遺構 1 1 基が発見され、燃やされた木材がC14法で4世紀と判定された。これは肖古王と世子貴須から七支刀が献上された時期と一致。また、弾琴台土城の位置も漢城付近を流れる漢江上流約200kmにあり『書紀』神功52年（252・実年372）の記事と一致する。

倭国は一連の新羅討伐、百済の対高句麗戦支援により倭弥呼以来の念願だった鉄資源の安定確保に成功する



韓国の弾琴台土城（忠清北道忠州市）から出土した鉄鋌（国立清州博物館）
（「ひもろぎ逍遥」2011年 04月 26日記事より）



「倭の女王」時代から男王「讃」の半島進出へ

神功皇后＝倭弥呼・壹與＋「筑後大善寺玉垂」

高良玉垂命が367年に博多湾岸から筑後三瀨に遷宮

『書紀』神功69年（269・実年389）神功薨去。390年応神即位。

*「大善寺玉垂宮の由緒書」（『高良社旧記・縁起』ほか）初代*の高良玉垂命は仁徳55年（367）に博多湾岸から筑後三瀨（みずま）に来て、同56年（368）に賊徒を退治。同57年（369）に高村（大善寺の古名）に宮を造営し筑紫を治め、同78年（390）に三瀨で没した。玉垂命には「九躰皇子」があり長男の斯礼賀志命が朝廷に仕え、次男の朝日豊盛命が高良山で筑紫を守護、その系列が後を継ぐとする。神功皇后玉垂命モデル説では「讃」斯礼賀志・「珍」朝日豊盛となる。（古田武彦）*万葉4261番「大王は神にし座せば水鳥のすだく水沼を皇都となしつ」の「水沼＝三瀨」*末代の玉垂命は589年崩御と伝わる。



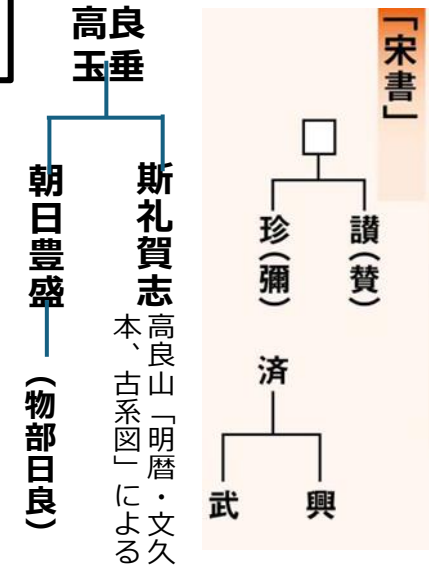
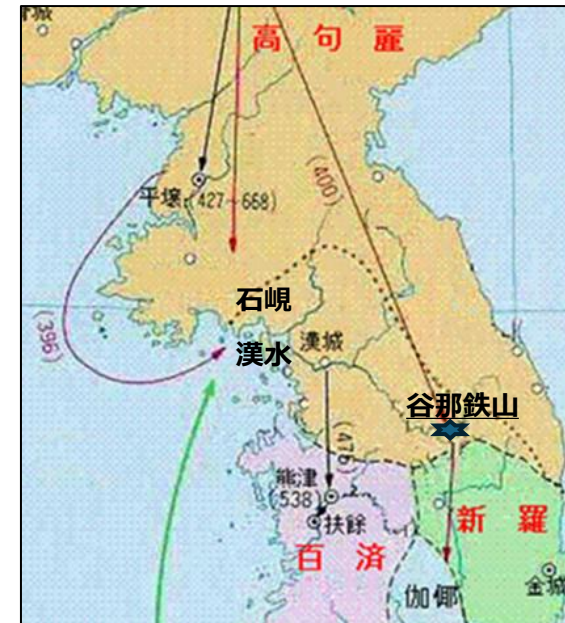
三瀨大善寺

390年に即位した「讃」は半島進出を積極的に進める

① 391年に「讃」は半島南部（百済・任那・新羅）に侵攻（神功は389年に薨去）◆『好太王碑』倭は末卯年（391）を以て来り、渡海し百済加羅新羅を破り、以て臣民とす。

高句麗の反転攻勢と百済の屈服

② 392年に高句麗好太王は反攻をかけ、百済漢江以北まで併合し、百済辰斯王は死去。◆『三国史記』『百済本紀』辰斯王（385～392）8年（392）7月。高句麗王談德（好太王）、兵四萬を帥て、来りて北鄙を攻ち、石峴（そつきょん）等十餘城を陷す。（略）漢水の北の諸部落、多に没す（辰斯王385～392）狗原行宮で薨る。



「讃」の時代の半島進出ー「貴国に礼なし」とは

「礼なし」とは「倭国を裏切る高句麗への臣従」

③**392年**倭国の紀角宿禰等、阿花王を擁立、王として帰る

◆『書紀』応神3年（272・実年は392年）是歳、百済辰斯王（在位385～392）立ちて、**貴国の天皇に礼失（な）し**。故に紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰を遣して、その礼無き状を噴讓（ころ）はしむ。是に由りて、百済国、**辰斯王を殺して謝（つぐな）ひき**。紀角宿禰等阿花を王に立てて帰る。

「礼なし」とは、後の好太王碑と『書紀』の用例から倭国を裏切り「高句麗に臣従した」ことを意味すると考えられる。

371年に倭国の支援で高句麗を討ち「毎年の朝貢」を約していたのに高句麗に臣従、「奴客」となる

④**396年**に阿花王は好太王の攻勢に屈して**高句麗に臣従する**。

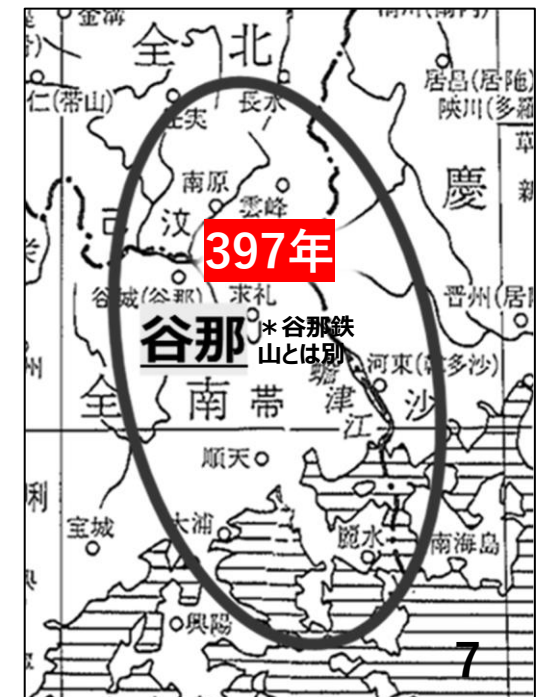
◆『好太王碑』永樂6年丙申（396）（高句麗）王躬ら水軍を率いて残国を討科し、…十八の城を攻め取る…百済王（阿莘王392～405）**跪き自ら今以後（高句麗の）永き奴客となることを誓う**。

「讃」は百済の高句麗臣従に反発し東漢一帯の百済領を侵食

⑤**397年**に倭国はこれに対し東韓一帯を占領。**百済は再び倭国に臣従を誓い直支（後の腆支王）を倭国に質に出す**。

◆『書紀』応神8年（397）**阿花王（392～405）立ちて貴国に礼無し**。故に我が枕彌多禮（とむたれ）・及び峴南（けむなむ）・支侵（ししむ）・谷那（こくな）・東韓の地を奪はれぬ。是を以て、王子直支（とき）を天朝に遣して、先王の好を脩（おさ）む。（*神功49年に「南蛮枕彌多禮」とある百済南部地域）

⇒「礼なし」は倭国を裏切り高句麗に臣従したこと



「讃」の時代の半島進出—激化する高句麗との抗争と讃の軍事介入

これに対し高句麗は新羅と連携し半島南部の倭国の支配域（任那・加羅）を侵略

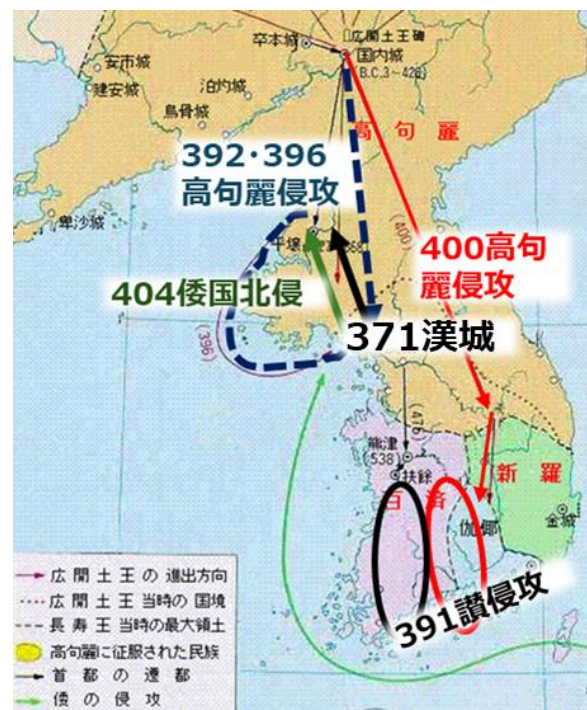
⑥400年に高句麗は新羅を救援、任那・加羅地域にも出征し、この攻勢により百濟は再び高句麗に臣従

◆『好太王碑』永樂10年（400）歩騎五万を遣し新羅に往く。倭中に満つ。官軍至りて倭賊を退く。倭を急追し、任那・加羅城を抜く。百済に軍を移し城を囲み、百済阿花王は倍旧の貢物と王子を質に出す。⇒倭国の軍を任那・加羅にひきつけ、その間に百済を討つ戦略か。

高句麗の「南侵」に対抗する「讃」の「北侵」

⑦**404年に倭国（讃）は反転攻勢をかけ、半島の奥深く侵攻**◆『好太王碑』永樂14年（404）甲辰、**而るに倭、不軌にして帶方界に侵入す**。好太王自ら兵を率い倭寇を斬りつくすこと無数。永樂17年（407）五万を派兵し倭寇を追い、平壤を過ぎ討伐す。兜類万余、資材を獲得す。⇒「平壤を過ぎ討伐」とは倭国が平壤まで侵攻していたことを示す。

⑧**405年の阿花王崩御に際し、倭国は百済腆支王**（てんしおう・ときおう）**を擁立し、漢城で即位させる**
◆『書紀』**応神16年**（405）、百済阿花王薨りぬ。天皇、直支王（ときおう）を召して謂ひて曰はく「汝国に返りて、位に嗣げ。」とのたまひ、仍りて且（ま）た**東韓の地を賜ひて遣す。東韓は、甘羅城・高難城・爾林城是なり**
◆『三国史記』**磔禮**（せつらい）訓解を殺し、自ら立ちて王となる。腆支、倭に在りて（*訓解の）訃るを聞き、哭泣し歸らむことを請す。**倭王、兵士百人を以て衛り送る。・・腆支倭人を留め自ら衛り、海島に依りて待つ。国人磔禮を殺し、腆支を迎へ即位せしむ。⇒5世紀初頭の百済王都漢城に兵士を含む九州の勢力が駐留していたことになるが、これを裏付ける考古学上の発見があった。**



讃は意に沿う王を擁立し、反対勢力から守るために兵士に護らせて即位させたことになります。



「讃」の時代の半島進出—確認された首都漢城への倭人・倭兵進出

(考古学の成果) 倭国勢力は栄山江進出以前5世紀初頭に漢城に進出していた

「韓国ソウル付近の百済遺跡で1600年前の日本人居住痕跡が発見」され5世紀初頭に倭人集団が百済首都「漢城」に進出していたことが判明した (2024年3月7日韓国ハンギョレ新聞報道)

(報道内容) 大韓文化財研究院は6日、今日のソウルである漢城に百済王朝が都を置いた漢城百済時代(～AD475年)を飾った土器装飾遺物の「埴輪」を初めて発見したと明らかにした。大韓文化財研究院のイ・ヨン Chol 院長は、「倭の職人たちが日本から移住して百済の官窯や工房に入り、百済の職人たちと一緒に作業した痕跡と思われる」とし「墓の装飾物である埴輪の実体が、韓国の首都圏の百済施設跡で明確に確認されたのは初めて」と話した。…1600年～1500年前に古代日本の移住民が百済のソウルの都に暮らし、特有の墓を建てて飾った可能性が提起され…百済の中央政府があった首都圏一帯の工房で、**栄山江流域の倭系遺物より時期が早い5世紀前半の埴輪が出た**ことで、百済の中央政府と古代日本の間の密接な直接交流が先に進み、続いて百済の領域である栄山江流域と倭との交流が続いた可能性を示している。

* 405年倭国兵士が腆支王を漢城に送り即位させていたから「職人」ではなく倭兵が漢城にいた



5世紀前半の刷毛目がある埴輪円形土器破片



帯跡と一定間隔の細線仕上げを確認できる土器破片



写真は 大韓文化財研究院提供。ハンギョレ新聞社電子版より転載。



城南市福井洞の百済土器窯遺跡



報道では職人たちの移住とするが、文献上「政治・軍事的に影響を持つ九州勢力の漢城進出を示す」

「讃」から「珍」へー複雑化する情勢の中倭国は百済南西部を「直接支配」

⑨ **421年**「倭王讃」宋の高祖に朝貢・425年宋の太祖に朝貢

『宋書』高祖の永初二年 **(421)**、詔していわく、「倭讃万里貢を修む。遠誠宜しく甄（あらわ）すべく、除授を賜うべし。」と。太祖の元嘉二年 **(425)**、讃、また司馬曹達を遣わして表を奉り方物を献ず。

425年～430年の間に讃崩御、弟珍即位（高良縁起では朝日豊盛命）

⑩ **431年**に、倭国「珍（425～430年までの間に即位）」は新羅に侵攻し明活山城（ミンハルガンソン慶州市）を包囲する。◆『新羅本紀』（訥祗麻立干（とつぎまりつかん）15年・431）四月。「倭兵來りて東邊を侵し、明活城を囲むも功なく退く。（明活城は404年にも倭兵に攻められている）

⑪ **433年**百済毗有王、新羅と和す（羅済同盟）

『三国史記』（百済本記）毗有王7年（433）7月、使を新羅に遣して和を請う。8年（434）2月。使を新羅に遣し良馬二匹送る。秋九月、又白鷹を送る。冬十月、新羅、良き金、明珠を以て聘（*来聘・礼物を持って訪れる）に報う。（新羅本記にも同様の記事）

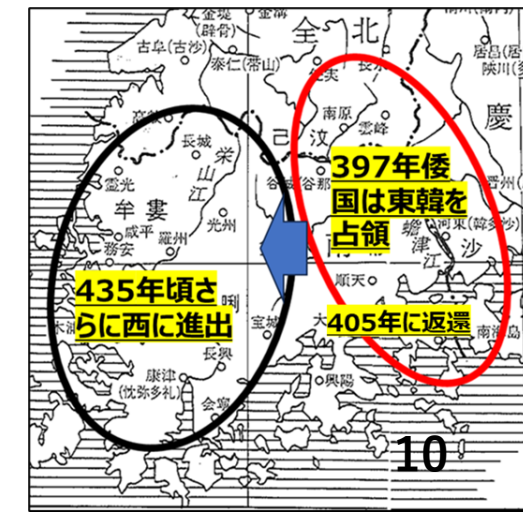
これに対し倭国「珍」は百済南西部を支配下に置き、軍・官僚を駐在させ統治を始める

⑫ **435年頃**に倭国（九州王朝）「珍」は百済王族の抵抗を抑え**百済南西部を支配**

◆『書紀』仁徳41年（実年435年ごろ）紀角宿禰を百済に遣して始めて**国郡の壇場（さかい）を分ちて、具（つぶさ）に郷土所出（くにつもの）を録す**。是の時に、百済の王の族酒君、礼無し。是に由りて、紀角宿禰、百済王を訶（こ）ひ責む。時に百済の王悚（かしこま）りて、鉄の鎖を以て酒君を縛（ゆ）ひて、襲津彦に附けて進上す。



明活山城
（慶尚北道 慶州市 千軍洞・普門洞）

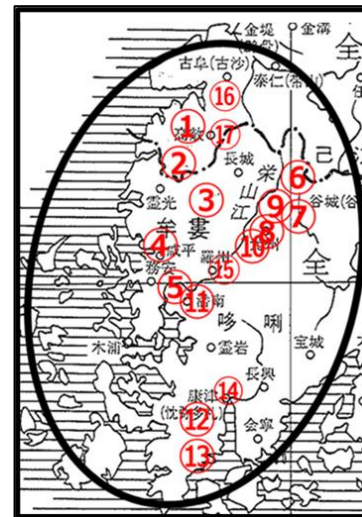


「珍」の百済南西部への駐留と「済」の即位と崩御

境界設定と郷土所出作成は「倭国の直接支配地」が設けられたことを示す

⇒倭国が百済の一部を事実上占領し、「郷土所出（税（貢納品）の徴収台帳）」を作成したことを示す。阿花王時代に百済中南部は倭国の支配下に入っているから、435年頃に百済南西部を支配したと考えられる。これは毗有王が433年に新羅と和したことへの報復。酒君は倭国の占領に反対したため倭国に引き渡された。

従って漢城に倭国勢力が進出するのは4世紀末から5世紀初頭、栄山江流域に北部九州の勢力が本格的に駐留するのは5世紀中葉以降となり、「百済の中央政府があった首都圏一帯の工房で、栄山江流域の倭系遺物より時期が早い5世紀前半の埴輪が出た」という考古学の状況は文献と合致する。



「済」の即位と崩御

*『宋書』太祖20年（443）、倭国王済、使いを遣わして奉獻す。また以て安東將軍・倭国王とす。

⑪ 444年に、「済」は兵を遣し金城を10日囲むが、兵糧が尽き撤退。新羅王訥祗麻立干（とつきまりつかん）は無理にこれを追って戦い兵の半数を失い撤退す。◆『新羅本紀』444年（訥祗麻立干28年）四月。倭兵金城（クムソン・新羅首都・現慶州市）を十日囲むも、糧盡きて乃ち歸る。王、兵を出し追はむとす。左右曰く、「兵家説きて曰はく『窮寇追うなかれ』と。」（略）王聽かず、數千餘騎を率いて、追ひて獨り山の東に合戦し、賊に敗れ、將士死者過半。

「讚」…413～421～425…
（弟）「珍」…438…
「済」…443～451…
（世子）「興」…462…
（弟）「武」…478～502…

「済」は「軍郡」を置き「珍」時代よりの半島支配をさらに固め崩御する

済死す。世子興、使を遣わして貢獻す。

28年（451）、使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東將軍は故のごとく、ならびに上る所の二十三人を軍郡（*「郡太守」=軍事指揮権を有する郡の長官、中国の郡は県の上位）に除す。

23人の「軍郡」は半島支配地の長官でコロニーの核となった前方後円墳の埋葬者が

「対高句麗戦」での済・興の崩御

⑫ **455年**に、高句麗は百済に侵攻する。 「済」の崩御はこの戦が原因か

◆『高句麗本紀』454年（長寿王の42年7月）「兵を遣して新羅北邊を侵す。」

◆『新羅本紀』455年（訥祗麻立干39年）十月、高句麗、百済を侵す。

「讚」…413～421～425…
（弟）「珍」…438…「済」…
443～451…
（世子）「興」…462…
（弟）「武」…478～502…

⑬ **475年**高句麗長寿王百済を討ち事実上百済は崩壊

「興」の薨去はこの時か

高句麗は475年に百済に侵攻し、王都漢城を陥落させ、蓋鹵王（がいろうおう455～475）を誅殺し、男女八千人を捕虜とした。子の文周王（477年に暗殺）は逃れ熊津に遷都したが、**事実上百済は崩壊。**

◆『三国史記』『高句麗本紀』長寿王63年（475）9月、王兵三萬を帥ゐて百済を侵し、王所都漢城を陥し、其王扶餘慶を殺して男女八千を虜として歸る。

◆『三国史記』『百済本紀』蓋鹵王21年（475）秋九月、麗王巨璉（長寿王）兵三萬を帥ゐ來りて王都漢城を圍む。王城門を閉じ出で戦うこと能わず。麗人兵を四道に分け挟み攻つ。又風に乗せ火を縱（ほしいまま）に城門を焚焼く。人心危懼（おそれおののき）、或は出て降はむとする者あり。王、窘（くるしみ）図る所しらず（どうしようもなく）數十騎を領ゐて、門を出て西に走（に）ぐ。麗人追いてこれを害す（殺害）。

◆『書紀』雄略20年（476*）冬、高麗王、大に軍兵を發（おこ）して、伐ちて百済を盡（ほろぼ）す。（略）百済記に云ふ、「蓋鹵王の乙卯年（475）冬、獊の大軍來りて、大城を攻むること七日七夜、王城降陷（やぶ）れて、遂に尉禮（いれ）を失い、国王及び太后、王子等、皆敵の手に没す」といふ。（*1年ずれ）

「興」の薨去の「諒闇（服喪）」期間を経て478年に武は高句麗討伐に臨む

「倭王武の上表」478年：臣が亡考済、実に寇讐の天路を壅塞（ようそく）するを忿（い）かり、控弦百万、義声に感激し、方に大拏せんと欲せしも、奄（とも）に父兄を喪い、垂成の功（もう少しで達成できる功勞）をして一簣を獲ざらしむ（最後の務めが果たせず）。居しく（いしく・かしこまって・身を慎んで）**諒闇にあり兵甲を動かさず**。これを以て、偃息（えんそく・やすむ・中断）して未だ捷（か）たざりき。今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。⇒諒闇期間の後「今に至り」高句麗討伐を決意

「父は済、兄は興」とするのは、「父兄」を「済」の父「珍」と氏名不詳の「済の兄」とする説もあるが、そうすると「父兄の志」とは、「武」にとって「祖父と伯父の志」となり、父の「済」、兄の「興」の志が含まれず不自然だから。

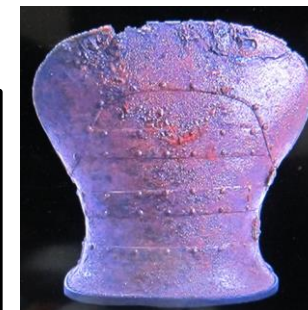


「済」は455年、「興」は475年に、「奄（とも）に」高句麗戦で崩御した可能性が高い

478年に諒闇が空けたのなら興の薨御は475年ごろで高句麗により百済が崩壊した年次と一致

「諒闇（喪に服する）」期間は3年：『論語』「夫れ三年の喪、天下の通（ひとみな）なる喪なり。」「『隋書』貴人は三年、外に殯す。⇒「昔より祖禰躬（みづか）ら甲冑をツラヌき、山川を跋涉し、寧処に違あらず。」の言葉通り興は自ら半島に出陣し、475年の高句麗戦で崩御したと考えられる。

また、「済」は451年～462年の間に崩御。「倭王武」の上表文から高句麗戦で崩御した可能性が高い。そうであれば、文献上455年の高句麗長寿王の百済侵攻時の崩御が第一候補となる。◆『新羅本紀』455年（訥祗麻立干39年）十月、高句麗、百済を侵す。⇒「奄に父兄を喪い」は通常「奄（にわか）に」と読むが、「済」と「興」の崩御は明らかに年次が違う。従って「奄（とも）に」と読んで2人とも同じ高句麗戦で没したとするのが適切。「倭王武」は興の崩御を受け475年に即位し、高句麗討伐の準備を進める。



「武」は475年に即位し、高句麗討伐に執念を燃やしたのでは



「武」が高句麗討伐を決意した478年の翌年に高句麗と戦ったのは「筑紫の勢力」

⑪ 479年東城王を軍事力で擁立し高句麗を討つ

倭王武ら倭の五王は倭国（九州王朝）の大王たちだった

雄略23年（479）に倭国「武」は末多王を東城王として擁立。「筑紫国の軍士」に護られて百済に帰国。「筑紫の将軍」が高句麗を攻めた。つまり475年の百済崩壊後「筑紫の軍士・将軍」らが高句麗と戦い百済を復興させたもので、当時の百済は筑紫の倭国によって守られ、国として維持されたことを表す。

◆『書紀』雄略23年（479）四月、百済文斤王（もんこおう三斤王477～479）薨る。天王、昆支王（こんきおう）の五子中第二の末多王の幼年くして聰明（さと）きを以て、勅して内裏に喚（め）し、親ら頭面を撫で、ねむごろにいましめて、其の国に王とす。兵器を賜ひ、筑紫国の軍士五百人を遣して、国に衛（まも）り送りて、是を東城王（479～501『三国史記』）とす。是の歳、百済の調賦（みつきもの）、常の例より益（まさ）れり。筑紫安致臣・馬飼臣等、船師（ふないくさ）を率ゐて高麗を撃つ。⇒502年に末多王は廃され「筑紫の島」で生まれた武寧王が即位。◆『書紀』武烈4年（502*）是歳、百済末多王無道にして、百姓に暴虐す。国人遂に除き嶋王を立て、是を武寧王とす。

『宋書』倭国伝と「倭王武の上表文」

倭国は高麗の東南大海の中にあり、世々貢職を修む。高祖の永初二年(421)、詔していわく、「倭讃万里貢を修む。遠誠宜しく甄(あらわ)すべく、除授を賜うべし。」と。太祖の元嘉二年(425)、讃、また司馬曹達を遣わして表を奉り方物を献ず。

讃死して弟珍立つ。使いを遣わして貢獻し、自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭国王と称し、表して除正せられんことを求む。詔して安東將軍・倭国王に除す。珍、また倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔国將軍の号に除正せんことを求む。詔して並びに聴す。(※『宋書』文帝紀。「元嘉十五年(438)四月己巳。倭国王珍を安東將軍とす」。)

二十年(443)、倭国王済、使いを遣わして奉獻す。また以て安東將軍・倭国王となす。

二十八年(451)、使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東將軍は故のごとく、ならびに**上る所の二十三人を軍郡(※「郡太守」郡の長官)に除す。**済死す。世子興、使を遣わして貢獻す。

世祖の大明六年(462)、詔していわく、「倭王世子興、奕世(えきせい・代を重ね)忠を戴し、藩を外海に作(な)し、化を稟(う)け境を寧(やす)んじ、恭しく貢職を修め、新たに辺業を嗣ぐ。宜しく爵号を授くべく、安東將軍・倭国王とすべし。」と。

興死して弟武立ち、自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大將軍、倭国王と称す。

順帝の昇明二年(478)、使を遣わして上表していわく、「封国は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖禰躬(みづか)ら甲冑を擐(つらぬ)き、山川を跋涉し、寧処に違あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国、王道融泰にして、土を廓(ひら)き、畿を遐(はるか)にす。累葉朝宗して歳に愆(あやまら)ず。臣、下愚なりといえども、忝なくも先緒を胤(つ)ぎ、統(す)べる所を驅率(くりつ)し、天極に帰崇し、道百濟を遙(へ)て、船舫を装治す。しかるに句麗無道にして、図りて見吞を欲し、辺隸を掠抄(りやくしょう)し、虔劉(けんりゅう)して已まず。毎に稽滯(けいたい)を致し、以て良風を失い、路に進むというといえども、あるいは通じあるいは不(しか)らず。臣が亡考済、実に寇讐の天路を壅塞(ようそく)するを忿(いか)り、控弦百万、義声に感激し、方に大挙せんと欲せしも、奄(とも)に父兄を喪い、垂成の功(もう少しで達成できる功労)をして一簣を獲ざらしむ(最後の務めが果たせず)。

居(い)しく(いしく・かしこまって・身を慎んで)諒闇(りやうあん)にあり兵甲を動かさず。これを以て、偃息(えんそく・やすむ・中断)して未だ捷(か)たざりき。今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申べんと欲す。義士虎賁(こほん)文武功を效(いた)し、白刃前に交わるともまた顧みざる所なり。もし帝徳の覆戴(ふさい)を以て、この彊敵(きやうてき)を摧(くじ)き克(よく)方難を靖んぜば(わざわいをおさめれば)、前功を替えることなけん。窃かに自ら開府儀同三司を仮し、その余は咸(み)な仮授して以て忠節を勧む。」と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭王に除す。14